

BOØWYが育ったまち

若者相手に熱く音楽を語る大人たちがいた



◀「新星堂」やレコード店「名曲堂」があったストリート

伝説のロックバンドがここから始まった

●若者文化を育てた高崎の土壌

1960年代から70年代、ロックは若者の心を動かし、時代をも動かし、たエネルギーシユなムーブメントだった。

高崎のまちなかには県内一円から若者を集める楽器店、レコード店、ブランドショップがたくさんあった。店の人たちは高校生や学生を相手に熱く音楽を語り、多くのアマチュアミュージシャンを育てた。どの店にも音楽に詳しいおもしろい店員が必ずいて、初めてギターを持つような高校生が、楽器選びやサウンドづくりのアドバイスを受けたり、音楽談義に花を咲かせたり、数少ない情報交換の場となっていた。こうしたショップを見て歩くのが、高崎のまちの楽しみ方であった。

伝説のロックバンドBOØWY（氷室京介、布袋寅泰、松井常松、高橋まこと）とBUCK-TICK（櫻井敦司、今井寿、星野英彦、樋口豊、ヤガミトール）は、こうした高崎のまちから生まれた。

●BOØWY伝説が始まった地

BOØWYは1988年の解散

後も根強い人気を持つ。氷室、布袋、松井の3人が高崎出身で、高崎はBOØWYファンの聖地である。彼らがロックを聴き、ギターを手にし、ステージで激突し、プロをめざして東京へ向かうまでの足跡が、このまちに刻まれている。

氷室と松井は高崎市内の倉賀野小学校の同級生で、17歳で夭折した「山田かまち」も同じ小学校の同級生だった。かまちが残した詩や絵画は「高崎市山田かまち美術館」に収蔵、展示されており、多くの若者に感動を与えている。彼らがロックに目覚めた70年代を象徴する作品も多い。

クラブジャズシーンで活躍する高崎出身のDJ小林径は、布袋が新島学園でバンドを組んだ先輩で、布袋の才能を見いだした。

●このまちから夢がスタートした

残念なことに、設備の整った貸しスタジオやライブハウスが当時の高崎にはほとんどなく、ライブ活動が高崎では頻繁に行えなかった。高崎で数少ない演奏の場は、高崎地域医療センターの4階にあるホールや市内の楽器店などで、高校生、アマチュアバンドのコ

ンサートが行われていた。この頃の高崎では、ロックは公的な施設から冷遇されていたが、高崎地域医療センターだけは、うるさいことを言わずに、ホールを提供してくれた。ロックやフォークのコンサートを、演劇、映画の自主上映会などが行われ、高崎のサブカルチャーの殿堂と言えた。

70年代半ばから高崎のアマチュアロックシーンは熱い潮流があり、氷室と松井のいたデスペナルティと布袋のブルーフィルムは抜きん出ていたようだった。二つのバンドは当時のアマチュアバンドの登竜門となるコンテスト「イーストウエスト」の79年大会で決勝を争った。

BOØWYがメジャーデビューすると市内のレコード店は、特別にコーナーを作って客に勧め、メンバーも時折、顔を見せていた。BOØWYにゆかりのあるショップは、まちなかから消えてしまい、医療センターで当時の高校生がロックを演奏した記憶も遠くなったが、高崎には新たな音楽ムーブメントが生まれている。2016年春に高崎を訪れた布袋は語った。「このまちから夢がスタートした」と。

